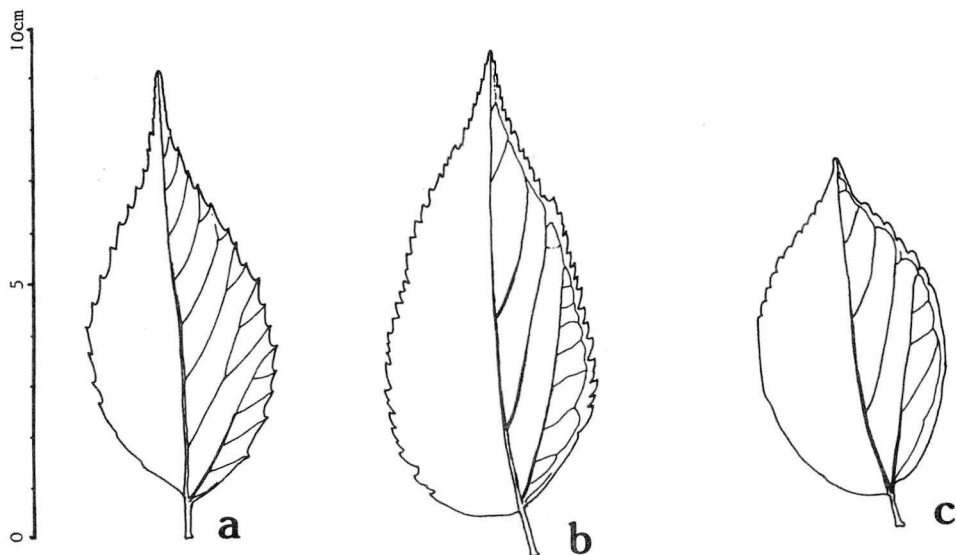


FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第2号
231 横浜市中区南仲通り5-60 神奈川県立博物館内
神奈川県植物誌調査会(振替口座 横浜 10195)
TEL 045-201-0926

JUN. 16. 1979

No. 2



a = ムクノキ
Aphananthe aspera Planchon

b = エゾエノキ
Celtis jessoensis Koidzumi

c = エノキ
Celtis sinensis Persoon var.
japonica Nakai

○ ムクノキ・エノキ・エゾエノキ

大場達之(県博)

新緑も色濃くなり春の花も咲き終って林の下などは緑一色のやや単調を感じさせる季節となりました。今回は身近な樹木を3種とりあげました。

エノキは里近くに多く、古くは一里塚に植えられたりまた民俗伝承の多い木です。その詳細は柳田国男：神樹篇と前川文夫：日本人と植物(岩波新書)にゆずるとしてエノキと同様に多いムクノキと両種と一見よく似ているエゾエノキの葉による区別を記します。

葉脈：まず注意すべき特徴は葉脈です。ムクノキ(a)では葉脈の先がまっすぐ鋸歯の先端へ入っていますが、エゾエノキ(b)とエノキ(c)では葉脈は葉の縁に近い所で上に曲り上方の脈と合流しています。この特徴はエノキ属とムクノキ属との重要な形質の違いです。またムクノキでは側脈が主脈に対してやや広い角度で出ており7~12対が数えられます。エゾエノキとエノキでは側脈は鋭角に出ており4対内外しかありません。この特徴でムクノキはすぐにエノキ、エゾエノキと区別できます。

鋸歯：ムクノキは鋸歯が葉の下から上まで平均してあり、どの鋸歯も同じ位の大きさで先端は鋭くなっています。エノキは葉の中央付近から上だけにしか鋸歯がなく

鋸歯は低くて先端は鈍くなっています。エゾエノキは両者の中間ではほぼ全周に鋸歯がありますが鋸歯の大きさはやや不ぞろいで尖りかたもムクノキほど鋭くありません。

葉形：ムクノキは葉の最も巾の広い所が中央部附近にあり、先端が長く尖っています。エノキは葉の巾の広い所が中央より上にあり先端は短く尖っています。エゾエノキは最大巾が葉の下部にあり先端の尖り具合はエノキとムクノキの中間的な形です。3種とも葉の下端は左右不ぞろいですがムクノキはその差が少なくほとんど左右同形といってもよい形です。

その他：ムクノキとエゾエノキは果実が黒く熟しますがエノキは赤褐色に熟します。

この3種のうちではエゾエノキが最も北にまで分布し、また最も湿った環境を好むようです。自然状態ではケヤキと共に林をつくることが多いといわれています。神奈川県でも広く分布し特にニリンソウの生えているような所によく見られるようです。ムクノキは中性的環境に見られシラカシ林の周辺に最も多いようです。エノキは自然の状態では海岸に多く後背砂丘やクロマツ林の下などに見られます。3種ともかつては平野に広く自然林を形成していたものと思われそうですが、古くから平野が拓かれてしまったために本来の生育環境を失ったものでしょう。

○ アメリカオニアザミ 県立鶴見高校 森 茂弥

今回の調査で私とその結果を楽しみにしているものの一つにアメリカオニアザミ〔*Cirsium vulgare* (Savé) Tenore〕の分布があります。

1973年の夏、私は鶴見の諏訪坂で変わったアザミを見つけました。葉にある刺が大変鋭く、素手では小さな葉さえ取れません。細かい相異点を除き、当時発売されたばかりであった北隆館発行「日本帰化植物図鑑」にのっているアメリカオニアザミによく似ているので、著者である長田武正氏に標本をお送りし、間違いなく本種であること、日本で三番目の発見であることを教えていただきました。

その後、鶴見区内の下末吉、北寺尾、東寺尾中台などに安定して自生しているのをたしかめ、神奈川区松見町、新浦島町、出田町、稲荷町、港北区新横浜駅前荒地、磯子区、大田区、品川区でも確認しました。日本通運の大きい建物ができて日陰になったため、激減してしまった新浦島町の大群落は見事なものでした。細長い空地に痛くて通り抜けられないほど密生したアメリカオニアザミから、風とともに舞い上がるおびただしい数の果実は、いまに横浜中を占領してしまうのではないかと、疑わせるのに充分すぎる資格を備えていました。

スカンジナビアから北アフリカに分布し、北アメリカにも侵入したという歴史をもつアメリカオニアザミの学名は「普通のアザミ」という意味で、繁殖力はやや強い方に属しそうです。生垣の下、アスファルトや石垣の割れ目などにわずかな土地を見つけて堂々と育ちます。半年ほど前、NHKの「明るい農村」で、ウシが近寄ると怪我をさせ、食用にならない厄介な雑草として、柄の長い大鎌で刈り倒す北海道での様子が紹介されていました。セイタカアワダチソウのように、心情的には嫌われながらも、どこかに優しさのある植物とは違い、アメリカオニアザミは英名を Spear thistle (ヤリアザミ) という巧妙な名が示すように、花に一応の観賞価値はありますが、刺が帳消しにしてしまいます。

高さ1~2m、淡い紅紫色の花をつけるこの植物を最も見つけやすいのは6月から8月にかけてです。他のアザミ類にくらべて花期にずれのあること、丈の高いこと、刺が極め手になります。

磯子区磯子二丁目の路傍で見たのは踏みつけられた憐れな存在でした。付近に開花株があるに違いありません。横浜市内の数ヶ所でこのようにしっかりと根を下したアメリカオニアザミが、他の地域で発見される可能性は極めて大きいと思っています。

○ ナノハナ 県立鶴見高校 森 茂弥

神奈川県中の植物を記録するとなれば、必ずこの問題がでてくると思ひながら筆をとります。それはごくありふれた、どなたもその名をご存知の「ナノハナ」についてのことです。街路樹の下や、ときには自然林の縁でも、意外に大きな株を見ることがあります。私はアブラナ科で黄色い花が咲き、ほっそりしたさやができる植物の名をきかされると「ナノハナ」にしてしまいましたが、本当は「ナンノハナ」と思っているのです。

お茶の水駅の向う側の土手には、あの急斜面に震災で家を失った人達がバラックを作り、住み続けていた四半世紀前にもナノハナが咲いていました。この種は掘伝いに西に進み、水道橋、市ヶ谷、四谷でも大群落がみられ

ます。葉が厚く、うすく白い粉をかぶっているところから、キャベツの系統をひいたセイヨウアブラナと判断できます。ところが、東中野の土手に生えているものはお茶の水型とほぼ同系統でも、上部の葉は軽く茎を抱き、より多くの実がなります。また、葉をその場で食べてみると、ピリッとした味がありません。多摩川、鶴見川、市内の街路に生えているのはほとんどお茶の水型です。多少疑問は残りますが、私はこれらすべてはセイヨウアブラナにしてもよいと判断しています。また、お茶の水には、やや葉がうすくて凹凸があり、カラシナの特徴を持つものが生え、東中野には葉が黄緑色で、中央の葉脈が白く、太く、上部の葉も強く茎を抱き、明らかにハクサイを連想させるものが混っています。乾いてしまった標本では、噛んだときの感触も味もわかりません。ですから、ますます結論が出しにくくなります。

横浜市内にはこの他にも、素性のよくわからない *Brassica* があちこちにずい分生えています。そのうちいくつかは、外国の図鑑や標本を見て、学名がわかるかも知れませんが、たとえば、アブラナとカブは染色体の構造からでは区別できないという事実からみても *Brassica* の分類がいかに困難なことを理解していただけると思っています。

私は不真面目に「ナノハナ」を三群に分けています。

第一群、本当のナノハナでアブラナの花。古くから俳句や和歌に詠まれ、小学唱歌にも登場し、水田の裏作として、ムギ類、ゲンゲとともに春のシンボルになったものの。

第二群、ナッパの花で、冬の間に食べきれなかったコマツナ、タイナ、ノザワナ、キョウナ、ハクサイなどの蕪(とう)の立ったもの。チリメンハクサイとの交配種と思われる切花にする品種も含む。要するに栽培品種。

第三群、ナンノハナといい、素性のわからない植物で路傍などに育つ帰化植物、(日本原産 *Brassica* はない)逸出した栽培植物か、外国籍の野生種か、ハマダイコンの例のように先祖返りしたものか、自然交配による新種か、なにがなんだかよくわからないもの。

毎年、ナンノハナを見ては溜息をついています。

○ 横浜市内帰化植物目録

	県立鶴見高校 森 茂弥
セイヨウノコギリソウ	アメリカオニアザミ
カッコウアザミ	ハルシャギク
ブタクサ	コスモス
ブタクサモドキ	キバナコスモス
オオブタクサ	マメカミツレ
カミツレモドキ	ペニバナボロギク
クソニンジン	ダンドボロギク
オオホウキギク	ヒメジョオン
ホウキギク	アレチノギク
コバノセンダングサ	ヒメムカシヨモギ
セイタカタウコギ	ハルジョオン
コセンダングサ	ヤナギバヒメジョオン
シロノセンダングサ	ケナシヒメムカシヨモギ
ヒレアザミ	オオアレチノギク
ペニバナ	マルバフジバカマ
ヒレハリギク	フジバカマ
イガヤグルマギク	ハキダメギク
フランスギク	コゴメギク

セイヨウオオバコ	アメリカキンゴジカ	メキシコマンネングサ	シロザ
ツボミオオバコ	イリオモテニシキソウ	ツルマンネングサ	アカザ
ピロウドモウズイカ	シマニシキソウ	アマナズナ	ケアリタソウ
タチイヌノフグリ	オオニシキソウ	ヒメアマナズナ	アメリカアリタソウ
オオイヌノフグリ	コニシキソウ	セイヨウアブラナ	ハリセンボン
ケチヨウセンアサガオ	キバナノマツバニンジン	ナタネハタザオ	ゴウシュウアリタソウ
シロバナチヨウセンアサガオ	ハマビシ	カラクサナズナ	コアカザ
ヨウシュチヨウセンアサガオ	イモカタバミ	クジラグサ	ウラジロアカザ
センナリホウズキ	ムラサキカタバミ	イヌナズナ	ホウキギ
フウリンホウズキ	アメリカフウロ	エゾスズシロモドキ	ノハラヒジキ
ハコベホウズキ	アメリカクサネム	キレハマメグンバイナズナ	シャクチリソバ
アメリカイヌホウズキ	セイヨウミヤコグサ	コシミノナズナ	ハイミチヤナギ
ワルナスビ	ネビキミヤコグサ	マメグンバイナズナ	ソバカズラ
ラシャナス	シロバナシナガワハギ	モリカンドウ	ツルタデ
ヒラナス	コシナガワハギ	オランダガラシ	ツルドクダミ
イヌホウズキ	シナガワハギ	オオアラセイトウ	オオケタデ
ケイヌホウズキ	コマツブウマゴヤシ	ハマダイコン	アメリカサナエタデ
ハリナスビ	コウマゴヤシ	ミヤガラシ	ヒメスイバ
ヒメオドリコソウ	ムラサキウマゴヤシ	シロガラシ	アレチギシギシ
オランダハツカ	アメリカツノクサネム	ノハラガラシ	ナガバギシギシ
ハナトラノオ	クスダマツメクサ	ハタザオガラシ	ヒロハギシギシ
ヤナギハナガサ	ツメクサダマシ	カキネガラシ	Parietalia judaica
ハリゲタピラコ	タチオランダゲンゲ	ハマカキネガラシ	キショウブ
イヌムラサキ	ベニバナツメクサ	イヌカキネガラシ	ニワゼキシヨウ
ノムラサキ	ムラサキツメクサ	グンバイナズナ	オオニワゼキシヨウ
ヒレハリソウ	シロツメクサ	シュウメイギク	ヒメヒオウギスイセン
クサキョウチクトウ	アレチヌスビトハギ	セイヨウキンポウゲ	ハナニラ
セイヨウヒルガオ	オキジムシロ	オランダミミナグサ	ニラモドキ
アメリカネナシカズラ	セイヨウヤブイチゴ	ノハラナデシコ	クサイ
チチコグサモドキ	アオイゴケ	ムシトリナデシコ	コガネガヤツリ
ヒメヒマワリ	アメリカアサガオ	ホザキマンテマ	シバムギ
イヌキクイモ	マルバアメリカアサガオ	シロバナマンテマ	コヌカグサ
ブタナ	マルバアサガオ	オオツメクサ	クロコヌカグサ
トゲチシャ	アサガオ	ウシオツメクサ	ハイコヌカグサ
オオハンゴンソウ	マツバゼリ	ウスベニツメクサ	ハルガヤ
ハナガサギク	フランスゼリ	コハコベ	カラスムギ
キヌガサギク	コエンドロ	スベリヒユ	コカラスムギ
ノボロギク	ノラニンジン	ヒメマツバボタン	オートムギ
ハクケイコメナモミ	ウイキョウ	クルマバザクロソウ	オニカラスムギ
セイタカアワダチソウ	オオフサモ	アメリカヤマゴボウ	コバンソウ
オオアワダチソウ	アレチマツヨイグサ	オシロイバナ	ヒメコバンソウ
オニノゲシ	オオマツヨイグサ	ヒメシロビユ	イヌムギ
Crepis capillaris	コマツヨイグサ	ヒメアオゲイトウ	ムクゲチャヒキ
アカミタンポポ	オオバナコマツヨイグサ	アメリカビユ	ヒゲナガスズメノチャヒキ
セイヨウタンポポ	ヒルザキツキミソウ	ハイビユ	カラスノチャヒキ
ゴウシュウヒナギク	マツヨイグサ	ホナガアオゲイトウ	アレチノチャヒキ
オオオナモミ	イチビ	ホソアオゲイトウ	ウマノチャヒキ
イガオナモミ	フヨウ	イヌビユ	メウマノチャヒキ
トゲオナモミ	ヒレタゴボウ	アカビユ	カモガヤ
ヒナキキョウソウ	ギンセンカ	オオホナガアオゲイトウ	コメヒシバ
キキョウソウ	フウロアオイ	スギモリゲイトウ	コウセンガヤ
アレチウリ	ゼニバアオイ	イガホビユ	ジュズダマ
ノジシャ	ウサギアオイ	アオゲイトウ	Sphaenopholis obtusata
オオフタバムグラ	ハイアオイ	ハリビユ	ハマガヤ
トゲナシヤエムグラ	ゼニアオイ	ホナガイヌビユ	シコクビエ
ムジナオオバコ	フユアオイ	センニチノゲイトウ	スズメガヤ
ホソバオオバコ	キクノハアオイ	ホコガタアカザ	シナダレスズメガヤ
ハラオオバコ	キンゴジカ	ハマフダンソウ	コスズメガヤ

オニウシノケグサ	シマスズメノヒエ
ヒロハノウシノケグサ	アメリカスズメノヒエ
ナギナタガヤ	エダウチチカラシバ
ミノボロモドキ	カナリークサヨシ
シラゲガヤ	ヒメカナリークサヨシ
ムギクサ	セトガヤモドキ
ヤバネオオムギ	オオガワガエリ
ネズミムギ	コイチゴツナギ
ホソムギ	ナガハグサ
ボウムギ	オオスズメノカタビラ
ドクムギ	ライムギ
コネズミガヤ	ザラツキエノコログサ
ハナクサキビ	セイバンモロコシ
オオクサキビ	

○ 横浜・川崎ブロック

(MIN)南区中里にあるハシバミを確認に行ったが辛うじて1本のみが残存していた。以前は畠に続く崖地に何本もあったが現在は崖下迄草並が迫ってきた。(Apr. 1).

(ISO)磯子区永取沢より円海山へ入る。ここ担当の間部、坂本、佐々木、三氏に同行したのが先ずアワブキを確認する。本種は日野町(現洋光台)や戸塚区上郷などにあったが絶えてしまった。鎌倉十二所附近に現存する。横浜・三浦地域では珍しいものになった。更にイヌザクラを見出す。これもこの地では稀なものである。かつて近隣の上郷で榎山泰一先生が見出したが現存しない。(Apr. 8).

(MIN)南区北永田で7・8本のミヤマナルコユリを見出す。ここにはマルバアオダモもあり横浜では珍しいものである。この地が中里、別所附近と共にミヤマカンスゲを豊産することは特異的である。(Apr. 14)

(MIN)南区別所でヨウラクランの健在を確認した。港南区野庭にあったものは如何であろうか。コジュズスゲを採取、他にハシカグサ、ミサキカグマ、ハリガネワラビなどがあったが標本用には貧弱な個体で採取しなかった(May. 4)。 長谷川義人

○ 県北ブロック

・ 調査予備学習会。第1回4月15日(城山)、第2回5月20日(三井)、第3回6月24日(大室山)予定。参加希望者は大越路に午前10時集合。

・ アオナラガシワ考

Quercus aliena Blume var. *pellucida* Blume
5月3日、中沢で本種を観察(城川)。イ。樹皮縦裂、薄片剝離。ロ。若枝、葉の表裏とも全く無毛。ハ。葉柄3~5mm、葉脈12対ぐらい。ニ。堅果の長さ25~30mm、殻斗径17~18mm、本県では初めての報告であろう。日本植物誌(大井)の*Q. pellucida* Nakaiオオミズナラがこれにあたるのであろうか。ミズナラとナラガシワの間種個体とする。日本樹木総検索誌(杉本)は本種の分布を長野及び愛知以西とする。樹木大図説(上原)はナラガシワまたはカシワの雑種ならんとする。有用樹木図説(林)は本種の分布を群馬、長野、東京以西の各府県としている。さらに本種とコナラの雑種をオオバコナラといい本州、四国、九州に分布するという。本種の母種ナラガシワは山形、群馬、北陸、東京以西に分布するとしているが林氏等の丹沢山塊植物報告(林氏研究報告133号)には表丹沢の栗木洞にあるナラガシワの記載はない。

・ 県北地区は植物の宝庫?であるにもかかわらず調査員希望者が大変少なくて淋しいかぎり!速くとも不便でも続々と調査員が集ってこそ真の植物愛好者の面目躍如というもの。県北への希望を期待します。

城川 四郎

○ 湘南ブロック

湘南ブロックでは、平塚市博物館と学芸員の浜口哲一さんのご協力で、ブロックの連絡会合の場所を同館とし、5月12日、第1回の全員連絡会を開き、つぎのことについて話し合った。・各地区ごとの打合せと各メッシュ担当者の最終決定。・各地区の調査活動についての発表。・調査活動上の問題点について。・湘南ブロックとしての今後の調査活動について。

各地区の調査活動

・ 平塚市 平塚市の植物については守矢淳一先生の作られた詳しい目録があるので、それを手引きに調査を進めている。この目録にない最近の記録としては、ヤマリソウ(土屋4月20日)。ミツデカエデ(上吉沢5月2日)。フユイチゴ(下吉沢5月24日)などがある。また帰化植物でもいくつかの新顔が現われノハラツメクサ(立野町5月15日)。ヒゲナガスズメノチャヒキ(千石河岸5月23日)。タチオランダゲンゲ(山下5月21日)などが発見された。 浜口 哲一

・ 伊勢原市 昨年まとめた調査目録をもとに、3月27日より調査採集を始めた。目録を1つ1つつぶしながらの点は便利だが、土・日をフルに利用しても調査範囲が広いので、自生地の極めて僅かなものについては花期に合せての採集が困難である。6月上旬までの採集種は各メッシュとも140~190種で、合わせて270種を越えることができた(但し国定公園内は未調査)。なお今迄の調査に見なかった、オオカニツリ、ハルガヤ等10数種を加えることができ、4月下旬には、イカリソウの大群生地一面に咲きそろった見ごと花を見ることができた。

守矢 淳一

・ 茅ヶ崎市、寒川町 昨年印刷した茅ヶ崎市植物目録資料を基に調査を進めている。茅ヶ崎産のものは180種以上、寒川産のものは200種以上の標本を作成した。ヒメコパンソウ、ノジシャ、サギゴケ、ミズタバコ、シロイヌナズナ、コメツブツメクサ、セイヨウノコギリソウ、ブタナ、ヒメコウガイゼキショウなども追加した。

小原 敬

・ 藤沢市 5月12日の湘南地区の初顔合わせ(平博)で藤沢地区の初顔合わせ。席上で調査地域の分担と当面の会合日(5月20日、6月2日)を決定。5月20日は、市内大庭城跡附近で観察。ウラジロの小群落は残念ながら枯死。サイハイランの開花1株。花期にある30種程宮地氏が腊葉に。6月2日は、県立教育センターで打合せ。調査地域を再確認し各自による今後の調査(と腊葉)の実施を申し合わせる。次回会合は、センターで6月30日14時に。当日は腊葉を持ちよりありきたりなのは同定。藤沢地区のメンバーには教育センター生物教室の楠元、高木両先生がお仲間入りし市の中心部の同施設が会合その他で利用させて頂けるのが何よりの強味。それに県立青少年センターの宮地先生もお仲間今後本部との連絡等もたいへん地の判を得ていて今後大いに利用協力させて頂き本部の御期待に副いたいと思います。

根本 平